

52

紅葉山文庫書物奉行・深見有隣の事績

今井 秀

今井整形外科

1. 要旨

深見有隣は徳川吉宗の側近学者で、寄合儒者から書物奉行に転じ紅葉山文庫で翻訳・考証に長年携わった。有隣は明朝や清朝の総合法典『大明会典』『大清会典』や西洋の科学技術書『奇器図説』の翻訳、古書の抄録・校訂にあたったほか、備荒用作物として甘藷（サツマイモ）の普及にも関与した。

2. 生い立ち

先祖は明の福建省出身で、祖父の高大誦は渡来し長崎で唐通詞を務め深見氏を名のった。

父の深見玄岱（1649-1722）は長崎で岩永宗故に、その後独立性易に学び儒学、書、医学に通じ、宝永六（1709）年新井白石の推挙で幕府儒官となった。有隣は玄岱の次男で、元禄四（1691）年に生まれた。享保三（1718）年父の致仕を受け家督を継ぎ儒者となった。

3. 長崎出張と『大清会典』翻訳

吉宗は將軍就任直後より幕府の蔵書や記録に並々ならぬ関心を示し、臣下に書物の収集・筆写を命じた。また清の制度や典礼に深い興味を抱いていたが、享保五（1720）年紅葉山文庫に『大清会典』が納本されると、玄岱・有隣親子に翻訳を命じた。有隣は翌年江戸を出発し長崎へ赴き、長崎在留の中国人に問いかけ『大清会典』の翻訳をすすめる、5年がかりで『大清会典和解』を編纂した。

また長崎では紅葉山文庫のための書籍収集に携わったほか、清朝の諸制度に関する吉宗の質問を長崎滞在中の中国人朱佩章に問い合わせる役目も担った。質問は荻生観から有隣に伝えられ、有隣は通訳を介し朱佩章の答えを『清人答問覧』に書き記した。

4. 書物奉行に任命され長年吉宗に仕えた

有隣は初め久大夫と称した。浅井奉政の死去にともない享保十九（1734）年8月8日書物奉行に任命され、8月18日新兵衛に改名を許された。相役の書物奉行は水原保氏・川口頼母・奈佐又助・桂山義樹であった。享保二十一（1736）年有隣と桂山義樹は『奇器図説』の翻訳を行った。

延享元（1744）年測量御用を拜命し3週間ほど毎日吹上御所に向向いた。そして明和二（1765）年西丸裏門番の頭に転じるまでの32年間書物奉行をつとめた。安永二（1773）年83歳で没し、吉宗公も眠る上野寛永寺に葬られた。

5. 甘藷（サトウキビ）につづき甘藷栽培を推奨

砂糖は生活必需品でありながら、当時は専ら中国からの輸入に頼っていた。吉宗は砂糖の原料として甘藷に関心を寄せ、享保十三（1728）年薩摩藩士落合孫右衛門を呼び寄せ甘藷を濱御殿の庭に試植させ、次に駿河・長崎などで栽培させた。そして有隣と川口頼母に中国の産業技術書『天工開物』や府志・県志の調査を命じた。有隣は延享元（1744）年栽培法を書いた『甘藷考』一冊を、翌年それを増補・改訂し吉宗に提出している。

また享保十七（1732）年西日本で蝗による米の大凶作で多くの餓死者が出た際、吉宗は長崎の事情に詳しい有隣に長崎近辺での飢饉の状況を尋ねた。これに対し有隣は“長崎や薩摩では甘藷が食用に栽培され、大飢饉でも大いに役立った”と答えた。

当時江戸では処士の青木昆陽が甘藷の栽培法を研究していた。享保十八年冬甘藷栽培に詳しい長崎の鍛冶平野良右衛門が上京したので、有隣は吉宗に昆陽と良右衛門を推挙し、種芋を取り寄せ吹上の御庭に試植させた。その後昆陽は甘藷を栽培し救荒食とすべきことを吉宗に上書し、享保十九年小石川薬園での甘藷栽培を許された。よく繁殖したので上総・下総を中心に甘藷栽培が普及し、やがて江戸に入り庶民の日用食品となった。

昆陽は享保二十年『蕃薯考』を著し、元文元（1736）年薩摩芋御用掛を拜命した。明和四（1767）年2月書物奉行に任命されるも、翌々年72歳で没した。

6. 最後に

甘藷の普及に貢献した青木昆陽は「甘藷先生」と呼ばれその功績は高く評価されている。しかし民間の昆陽を吉宗に推挙し甘藷を試植させ、関東に広めた先駆者として有隣の功績も忘れてはならない。